Challenge（チャレンジ）

“今”を生きる

東北の片隅にある中小病院に赴任した若き医師。
試行錯誤の日々の中から、医療人としてのあるべき像が結ばれはじめた。

商品開発につながった“貧血問題”

ときわ会常磐病院
内科医
山本佳奈氏

前回紹介した通り、私は献血バスを見かけたことをきっかけに「貧血」問題を考え始めた。「日本は貧血大国だ」と問題提起をし、新書を上梓したことにより、昨年からロート製薬や永谷園と「貧血」を切り口にして女性の健康問題に取り組むこととなった。

ロート製薬との出会いは、昨年４月ごろ。私の新書を手にとってくださった人事総務部の坂手秀章さんから、女性社員の健康づくりとして「貧血対策」に取り組みたいと連絡をいただいたことがきっかけだった。坂手さんと私は、５歳ほどしか変わらない。「同世代の女性が、自分たちも取り組みたい問題に取り組んでいることに刺激を受けた」と話してくれた。うれしい限りだった。

同社を初めて伺った際、取締役副社長のジュネジャ・レカ・ラジュさんにお会いした。インド出身のジュネジャさんは、なんと10年以上も前から鉄欠乏性貧血の問題に取り組んできた研究者。母国インドはベジタリアンのほうが多く、今でも貧血は深刻だ。母国の貧血問題はもちろん、女性のダイエットややせが世界中で貧血をもたらしている現状に、「何とかしたい」との強い思いを私にぶつけてきた。

広報・ＣＳＶ推進部部長の河崎保徳さんにお会いしたのも、このときだった。目薬の開発だけでなく、健康の基本となる「食」も大事だと、レストランから農薬と化学肥料を使用しない農作物の生産まで取り組まれていることを聞いた。国産無農薬の果物を使用したフローズンアイスバーの製造販売は、なんと目薬製造のための技術が生かされているという。「社員の健康を守れずして、よい商品やサービスは提供できないというのが、ロートの理念です」と河崎さんはいう。目薬を作っている会社だと思い込んでいた私には、目から鱗だった。

昨年度は、ロート製薬社員向けの貧血についての講演をきっかけに、体質改善プログラムに参加、健康診断にフェリチンを追加することも提案した。本年度は、ロート製薬とＡＢＣクッキングスタジオとの共同プロジェクトへの参加や、Women's Health Labという、女性の健康を変えていこうという取り組みにも参加予定だ。貴重な機会に感謝している。

永谷園との出会いも、ちょうど１年ほど前。永谷園研究・開発本部健康食品事業部長の大隅聖子さんにお会いしたことがきっかけだった。第一線で働くキャリアウーマンにお会いしたのは、そのときが初めて。オーラが違った。大隅さんのような、仕事のできるかっこいい女性になりたいと真剣に思った。

女性の貧血問題に取り組んでいることを伝えたところ、働く女性をターゲットにした「冷え知らず」さんシリーズの新商品開発で鉄を入れてはどうか、とのお話をいただいた。数カ月後には、栄養機能食品となる鉄が入った味噌汁、葛湯、野菜ポタージュ、コンソメスープなどが発売され、新商品紹介のイベントでは一般の方を対象に、貧血の話もさせていただいた。

今年２月には、「子どもと一緒に美味しい！フルーツ青汁」も発売された。女性や子どもに不足しがちな「鉄」の入った栄養機能食品だ。苦みや渋みは一切ない。またスティック状のため、「海外にも持っていけるからうれしい」とＣＡや海外で学ぶ留学生は喜んでくれた。このように「貧血」対策を通じて、商品開発に本格的に携わらせていただけたことを光栄に思うし、大隅さんという女性にお会いできたことに感謝している。

私は、女性の健康を守る医師になりたいと思っている。専門医制度や医局に入ることを選択しなかった私は、壁にぶち当たりながらも応援し支えてくださる多くの人たちのおかげで、自分に必要な知識習得のために学ぶことができている。これからも精進していきたい。